「なごや認知症カフェ」の在り方に関する調査研究【概要版】

（1）調査の目的

「なごや認知症カフェ」の現状と今後の課題を明らかにすることで、実際の運営を行うカフェ運営者のみならず、「なごや認知症カフェ」の整備に関わる関係者が、現状の課題を共有し、今後の在り方について検討する際の材料を提供することをめざす。

（2）調査の概要

◎**調査対象**：2016年6月30日時点で開設されている「なごや認知症カフェ」86カ所
◎**調査方法**：調査票郵送、回収
◎**調査時期**：2016年7月21日（調査票郵送）～2016年8月31日（回収）
◎**調査票回収状況**：発送数86票　回収数76票
◎**回 収 率**：88.4%

（3）用語の定義

運営スタッフ：団体に所属し、「なごや認知症カフェ」の運営に携わる人
協力者：事前準備、運営、振り返り等に協力する団体以外の人（ボランティア）
参加者：上記の運営スタッフ、協力者以外の参加者（認知症の人や家族、地域住民など）のこと
認知症地域支援推進員：
認知症の人や家族が暮らしやすいまちづくりをめざし、地域におけるネットワークの構築、認知症ケアパスの作成・普及、認知症カフェの開設・運営支援などに取り組む専門職のこと。2016年4月から名古屋市内の全いきいき支援センターに1名ずつ配置されている。

1.「なごや認知症カフェ」とは

名古屋市では、認知症の人と家族を支援する仕組みとして「なごや認知症カフェ」を事業化している。「なごや認知症カフェ」は「認知症の人や家族、地域住民、専門職など誰もが気軽に集える場で、認知症の人や家族同士の相互交流・情報交換、家族の介護負担の軽減、認知症状の悪化予防又は地域での認知症啓発を目的とするもの」と定義され、次の5つの役割を担うことが期待されている。

① 認知症の人が安心して過ごせる場所（地域での居場所）
② 認知症の人を介護する家族の負担を軽減できる場所
③ 認知症の正しい理解が深められる場所（普及・啓発）
④ 認知症について気軽に相談できる場所
⑤ 地域でのつながりや連携が深められる場所（地域ネットワークづくり）

「なごや認知症カフェ」の推進や普及を図るため、名古屋市は、2015年7月から「なごや認知症カフェ登録事業」と「なごや認知症カフェ開設助成事業」を設け、2016年9月からは「なごや認知症カフェ運営助成事業」も開始している。2017年3月31日時点で「なごや認知症カフェ」は127カ所の登録がある。

「なごや認知症カフェ」の大きな特徴は専門職の配置である。専門職とは「医師・看護師等の医療関係者や社会福祉士・精神保健福祉士等の福祉関係者、認知症キャラバン・メイト等認知症に関する知識を習得している者」で、「認知症の相談業務に従事した経験のある者」を指す。専門職が配置されることで「いつ、どの段階で、どこに相談していいのか分からない」といった不安を抱く認知症の人や家族に対して役に立つ情報を提供して、早期診断・早期対応の機会を提供することをめざしている。

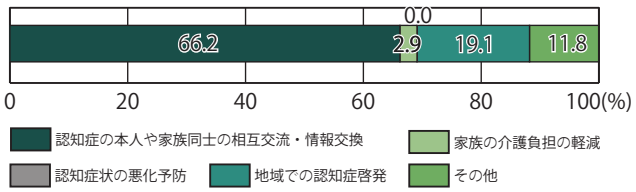
2.「なごや認知症カフェ」の現状

（1）開催目的

「なごや認知症カフェ」は、「なごや認知症カフェ登録事業実施要領」によると「（1）認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換、（2）家族の介護負担の軽減、（3）認知症状の悪化予防、（4）地域での認知症啓発」の全部または一部を主たる目的とする。

もっとも重視する目的を問う設問に対して、多い順に認知症の本人やその家族同士の相互交流・情報交換66.2%、地域での認知症啓発19.1%、その他11.8%、家族の介護負担の軽減2.9%であった。認知症状の悪化予防を挙げたカフェはなかった。

【もっとも重視する目的】



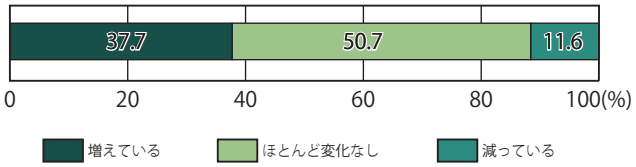
（2）参加者数とその変化

カフェ1回につき参加者の平均は13.9人である。内訳は65歳以上の認知症の人3.1人、64歳以下の認知症の人0.2人、家族1.9人、地域住民5.5人、いきいき支援センター職員0.4人、介護・福祉専門職1.3人、医療専門職0.4人、その他1.1人である。

参加者を性別で見ると、女性が男性に比べて3.5倍多い。男性の参加がないカフェは、全体の13.0%を占める。

カフェをこれまで3回以上開催した運営者を対象に「開設時に比べて参加者の変化を教えてください」と尋ねたところ、参加者が「増えている」のは37.7%、逆に「減っている」のが11.6%あった。

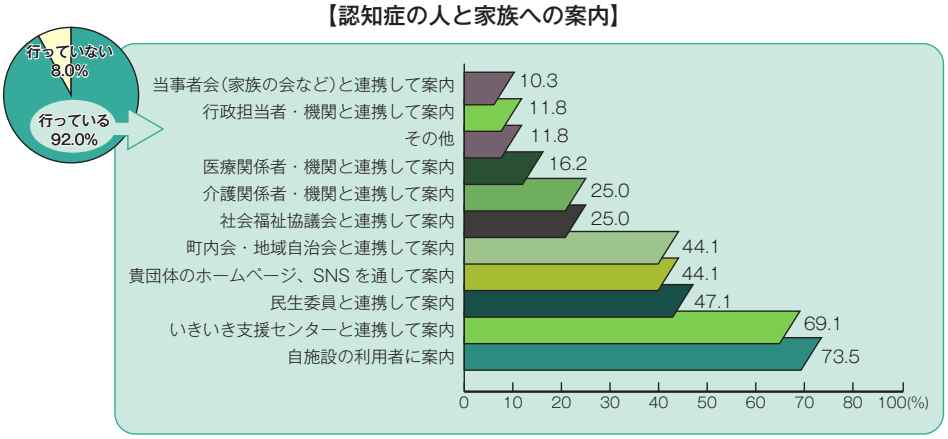
【参加者数の変化】



（3）広報

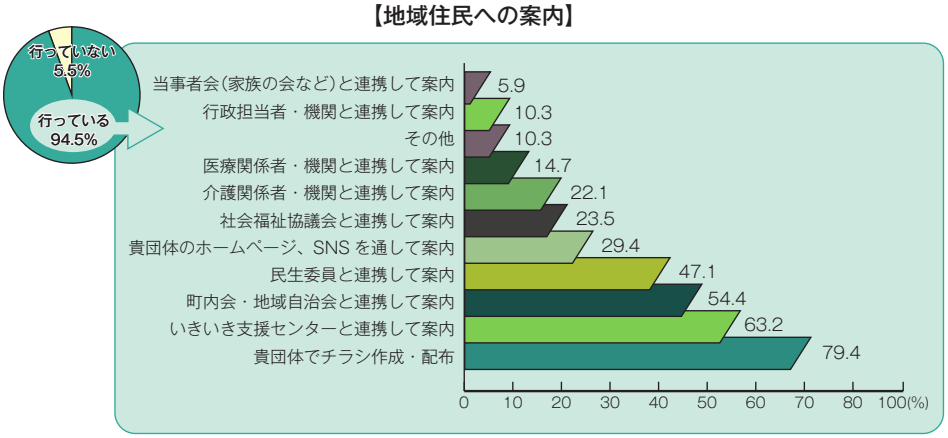
認知症の人や家族に案内を行っているカフェは92.0%である。案内方法は、多い順に自施設の利用者に案内73.5%、いきいき支援センターと連携して案内69.1%、民生委員と連携して案内47.1%、町内会・地域自治会と連携して案内44.1%、自団体のホームページ、SNS を通して案内44.1%である。

【認知症の人と家族への案内】



地域住民に案内をしているカフェは94.5%である。案内方法は、多い順に自団体でチラシ作成・配布79.4%、いきいき支援センターと連携して案内63.2%、町内会・地域自治会と連携して案内54.4%、民生委員と連携して案内47.1%、自団体のホームページ、SNS を通して案内29.4%である。

【地域住民への案内】



（4）協力者

カフェで活動する協力者の平均は5.4人である。その属性は、介護・福祉専門職24.4%、地域住民22.0%、民生委員12.2%、認知症サポーター9.8%、その他9.1%が多い傾向だった。また、協力者のいないカフェは12.3%ある。

協力者の募集は40.5%のカフェが行っている。その募集方法は自団体の関係者に募集43.3%がもっとも多く、いきいき支援センターと連携して募集33.3%、町内会・地域自治会と連携して募集30.0%、自団体でチラシ制作・配布26.7%が続く。

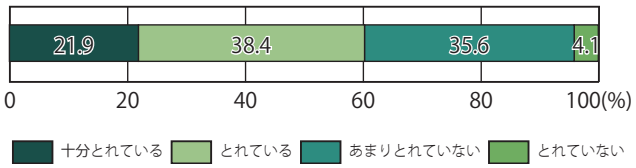
協力者のスキルアップについては、32.4%のカフェで取り組まれていた。

【協力者の属性】

地域住民	22.0%
医師	2.4%
民生委員	12.2%
医師以外の医療専門職	4.3%
認知症サポーター	9.8%
行政職員	1.2%
いきいき支援センター職員	7.3%
社会福祉協議会職員	3.0%
介護・福祉専門職	24.4%
当事者会（家族の会など）のメンバー	4.3%
その他	9.1%

（5）認知症地域支援推進員・いきいき支援センターとの連携

カフェ支援をしているのが認知症地域支援推進員といきいき支援センターである。「認知症地域支援推進員やいきいき支援センターはカフェを応援しています。連携はどれくらいありますか」という設問に対し、もっとも多かったのが「とれている」で38.4%、続くのが「あまりとれていない」で35.6%だった。



（6）地域（地域住民、町内会）との関わり

カフェを開設したことで地域との関わりが「増えている」と回答したカフェが45.3%ある。地域との関わりが「増えている」具体的な内容としては、以下のような自由記述回答があった。

一方で「ほとんど変化なし」と回答したカフェは54.7%あった。

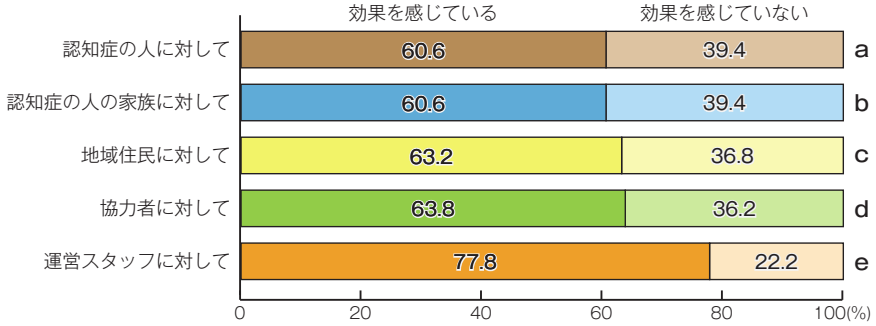
【地域との関わりの内容】

いかにして町内の方々に役立てることが出来るかを町内会役員の方とよく話すようになってきている【南区】
町内会長をはじめ老人会会長、民生委員等にご参加いただいている。また、案内配布などカフェの PR にもご協力いただいている【瑞穂区】
地域の方が認知症サポーター養成講座を受けている【中村区】
民生委員の方が協力的で告知などの助言をしてくださるようになった。またカフェボランティアの方がカフェ開催日以外でも毎週決まった曜日に施設にボランティアに来てくださるようになった【中村区】
カフェをきっかけに地域住民からいろいろな相談や地域行事への誘いをいただくようになった【西区】

（7）認知症カフェの効果

認知症の人に対して効果を感じているカフェは60.6%だった。同様に、認知症の人の家族に対しては60.6%、地域住民に対しては63.2%、協力者に対しては63.8%、運営スタッフに対しては77.8%のカフェが効果を感じている。

【認知症カフェの効果】

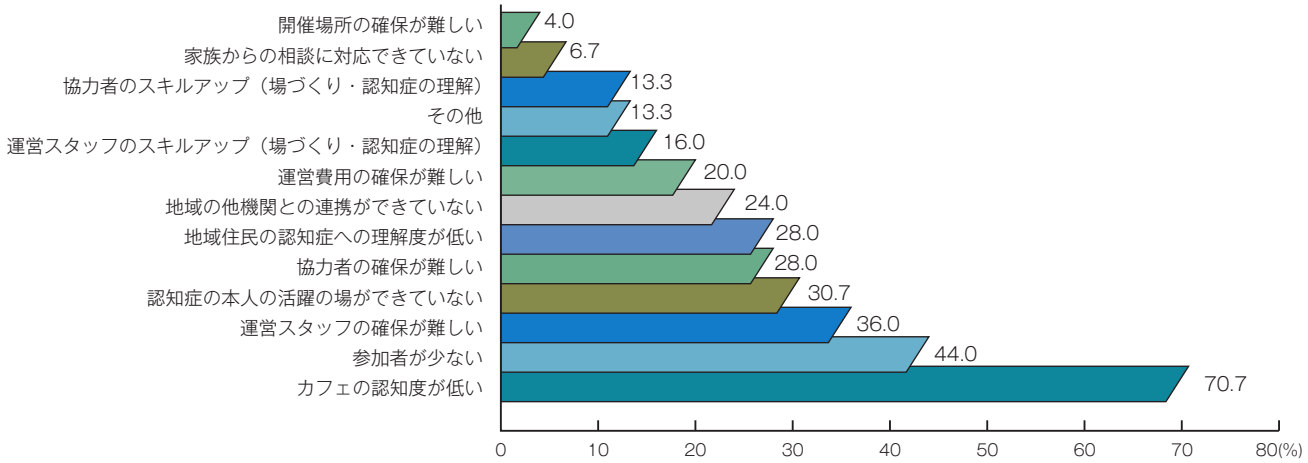


【認知症カフェの具体的な効果】

a	認知症の人	・カフェに参加中は表情がいきいきとされ、「楽しかった」と帰るときに言われる【北区】 ・「カフェに定期的に伺うことで、本人が以前に比べ明るくなった」「生活が規則正しくなった」「新しい友人が増えた」「出かける場所ができ、生きがいができた」「何もお話しできないけれど、出かけられることを楽しんでいる」「出かけてお茶を飲める場所ができ、性格が穏やかになった」「カフェは心からくつろげ、安心していられる場所」など好ましい効果が生まれている【千種区】 ・とてもイベントを楽しんでおられる。貴重な外部とつながる社会交流の場になっている【瑞穂区】 ・デイも利用されていますが、全然雰囲気が違うのでリラックスしてみえるように思います【千種区】 ・地域住民とご本人が顔なじみとなり、気軽に会話できる関係となっている【中川区】
b	認知症の人の家族	・本人が楽しまれている姿を見て、安心され前向きに変わられた【熱田区】 ・「同じような立場の方々と話ができ、慰められることがある」「本音で話せる友人がみつけられた」「自分自身の憩いの場所になっている。皆様から親切をいただいている」「介護の役立つ知識が得られる場所」「家族サロンしか知らなかったが何物にも代えがたい場所になっている」など、カフェに参加している間は介護から解放され、介護者の癒しの時間となっている【千種区】 ・「認知症」という病気を知っていただくことと、ご本人の姿（きちんと支援すれば安定）を見てもらえる【緑区】 ・「一緒に来られるところができてよかった。家ではほとんど会話しないがここではよく話ができて楽しい」と言ってくださっている【守山区】 ・気楽に看護師、ケアマネジャーと話ができる場所として効果大である【南区】
c	地域住民	・認知症への知識を深めようと質問される方が増加。気軽に認知症のご本人への声掛けをされる方が増加した【中川区】 ・自治会の方々ともとても仲良くなり、地域の防災訓練、施設の防災訓練など、おたがいに参加するようになった【瑞穂区】 ・アンケート結果（5回来店したり、リピーター向けアンケート）では認知症のイメージが変わった人が15人中11人【南区】 ・活動を通じての地域の方々を含むボランティアと参加者とのつながり構築に寄与している【名東区】 ・近隣の住宅より自治会長さんやボラさん、民生委員さんが参加。地域の方は認知症の方を見守り、カフェへ一緒にみえる。また防災についての話し合いをする【北区】
d	協力者	・認知症の方と直接関わることで認知症の方の「できること」に目を向けるなど、理解が深まっている【港区】 ・認知症への誤解や偏見が少なくなり、地域ネットワークづくりに取り組んでくださっている【瑞穂区】 ・認知症の方と普段関わりはないが、興味があり、協力したいと思っている方がたくさんいらっしゃる。そんな方たちの第一歩になっていると思う【瑞穂区】 ・ボランティアのため、人が人を呼ぶ効果は感じている【南区】 ・地域で認知症について話題にすることが多くなっている【名東区】
e	運営スタッフ	・認知症の方はもちろん、地域の方とのふれ合い、交流も含めとても貴重な時間を過ごさせてもらっている。地域の需要があることを実際に感じることができ、活動のモチベーションにつながっている【熱田区】 ・月1回の運営スタッフでの会議では、認知症の方と家族のボランティア参加に向けた支援の検討など参加者に向けた議論ができるようになってきている（モノ、カネの話が少なくなってきている）【南区】 ・認知症の人や家族と会話することで、その人たちが求めている思いを聞くことができた【守山区】 ・施設サービス、在宅サービス関係なく、介護職員として地域への連携協力ということへの意識が少しずつ高まってきているように感じている【中川区】 ・自分たちも地域の一員としての自覚が芽生え、参加者の笑顔や言葉がけからモチベーションが上がり、認知症ケアについても自ら学びたいというスタッフも増えてきた【中川区】

3.「なごや認知症カフェ」の課題

「なごや認知症カフェ」が自らの目的を達成するために克服すべき課題は何か。設問「今後、カフェを継続していくうえでの課題や問題点を教えてください（複数回答可）」に対する回答は以下のとおりである。



カフェ運営者の70.7%が「カフェの認知度が低い」ことを課題と捉えている。以下、多い順で見ると参加者が少ない44.0%、運営スタッフの確保が難しい36.0%、認知症の本人の活躍の場ができていない30.7%、地域住民の認知症への理解度が低い28.0%、協力者の確保が難しい28.0%である。

4. 課題の克服をめざして

「なごや認知症カフェ」の課題は、調査結果より「運営面：地域とのつながりをつくる」と「実践面：認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる」と整理できる。

【「なごや認知症カフェ」の課題】
【運営面】地域とのつながりをつくる
（1）認知度の向上
（2）連携
【実践面】認知症の人・家族が過ごしやすい環境をつくる
（3）仲間づくり
（4）場づくり

上記の課題を克服するためには、「地域を知り、地域とともにカフェを運営していくこと」が重要になると考えられる。なぜなら、地域を知ることで、カフェ運営者が（1）認知度の向上をはかる方策を検討できるし、地域にある他機関と（2）連携をはかることもできる。さらに地域とともに在ることでカフェを運営する（3）仲間づくりも可能になって、その仲間と協力して（4）場づくりを行うことができるからである。

【課題の克服をめざすカフェの取り組み】

（1）認知度の向上
・地域の様々な人びとに「認知症カフェ」というものを知ってもらいたいので、広報活動に力を入れている。地元の朝市（地元JA主催）でチラシを配布。施設周囲にのぼりを立てたり、看板を自分たちで作成し、設置している（少しずつ認知度は上がってきているようにも感じる）【中川区】
・近くのクリーニング屋さんにチラシを置いていただいて、お客さんに声かけしていただくようにしている【千種区】

（2）連携
・中村区は連携して介護に取り組まれているように感じる。そういった会に時間があるときは必ず管理者が参加し、カフェのみならずいろいろな情報を得るようにしている。その情報をカフェに活かしていこうと考えている【中村区】
・他事業所と連携をとり、プログラム等のアドバイスを受けている【中川区】

（3）仲間づくり
・自由な発想を大切にし、上下の分けへだてなく参加意識でもって運営している【南区】
・協力者（ボランティア）の役割分担、事前・事後のミーティングを必ず行う【守山区】

（4）場づくり
・参加者に認知症の方本人が見える際に、スタッフ（専門職）はそばにいるようにしている。参加者同士で認知症介護の大変さを話される方もあり、それを聞いてつらくならないようにするため【南区】
・楽しい、役に立つ企画を考えて提供したいという思いもあるが、提供するだけでなく参加者が交流する、相談できる場をもうけることを心がけている。あくまでも企画はそのきっかけになればという気持ちである【熱田区】
・専門職がかかわることで相談内容に柔軟に対応できる【天白区】
・毎回アンケートをとり、カフェに参加されている方のニーズに沿ったプログラムを施設内での「認知症カフェプロジェクトチーム」の会議にて検討している【中川区】

発　行：名古屋市認知症相談支援センター
発行日：2017年3月